

令和元年6月27日現在

機関番号：14301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K16881

研究課題名(和文)金工品の流通と製作技術伝播からみた古代東アジアにおける地域間交流研究

研究課題名(英文)The study of intercultural relations in ancient East Asia through an analysis of the distribution of metalwork and the spread of production techniques

研究代表者

稲田 宇大(金宇大)(Inada (Kim), Udai (Woodae))

京都大学・白眉センター・特定助教

研究者番号：20748058

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：古墳時代における日本列島と朝鮮半島各地との交流実態を解明すべく、両地域で出土する「金工品」の考古学的検討に取り組んだ。各種金工品の中でも、特に「垂飾付耳飾」と「装飾付大刀」を対象に、日韓の出土例の実物を観察する調査を実施した。属性分析に基づく型式学的検討と、実見観察調査の成果を組み合わせることで、当時の高句麗、新羅、百濟、そして大加耶の金工技術が、変化する朝鮮半島情勢の中でどのように影響を与え合い、倭へと伝わったのかを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日韓両国の出土資料を一律に、かつ悉皆的に扱って、技術的視点からより詳細な系譜関係を整理できたことは、従来の金工品研究とは一線を画する成果といえる。結果、日本列島出土資料の製作地や工人系譜について、歴史解釈へと昇華し得るより踏み込んだ具体的分析が可能となった。このように、古代の日朝関係の在り方について、出土資料の考古学的分析に基づく客観的な交流史像の一端を示せたことは、大きな社会的意義につながると考える。

研究成果の概要(英文)：In order to explore the actual state of the intercultural relations between the Japanese archipelago and the Korean peninsula during the Kofun period, I conducted archaeological analyses of the metalwork uncovered from both regions. I focused specifically on two types of metalwork, namely, pendant earrings and ornamental swords, personally conducting observational analysis of each artifact both in Japan and Korea. Combining the typological method based on attribute analysis and observation surveys of the artifacts, I clarified how the metalworking techniques possessed by Goguryeo, Silla, Baekje, and Daegaya interacted with one another against the changing political backdrop of the Korean peninsula and how these skills spread to the Japanese archipelago.

研究分野：考古学

キーワード：古墳・三国時代 対外交渉 金工品 型式学 製作技術

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

古代、とりわけ古墳・朝鮮三国時代における、日本列島と朝鮮半島各地の交流に関する研究は、従来文献史学からのアプローチが主流であった。しかし、1990年代以降に韓国での発掘資料が急増したことを受け、考古学的にこれを解明しようという試みが近年活発化している。文献史料の解釈に基づく当該時期の関係史へのアプローチが飽和状態を迎えつつある一方、日韓両国で出土している考古資料の様相は文献史料から導かれる両地域の交流史像に必ずしも合致するものでなく、考古学的方法による交流実態の検討は、新たな可能性を秘めた取り組みとして注目された。

2. 研究の目的

上記の時期における日本列島および朝鮮半島各地の地域間関係を考古学的に探るべく、両地域の古墳に納められた副葬品、特に金や銀といった貴金属で装飾を施した「金工品」の検討を試みた。「金工品」は、原材料確保の困難さや加工に必要な技術の高度な専門性を勘案すると、その製作工房は極めて限定的であったと推測され、当時の政治的権力集団の中核で一元的に管理されていたと考えられる。本研究では、金工品の流通状況から当該時期における地域間の政治的関係性を追究するとともに、金工品の製作技術の伝播・拡散の様相から、製作を直接的に担った工人集団の技術交流をも明らかにすることを目標とした。

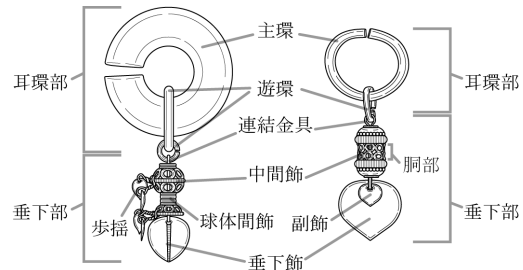


図1 新羅出土垂飾付耳飾の各部名称

3. 研究の方法

本研究では、従来の金工品研究からより踏み込んだ水準での分析をおこなうため、あらゆる金工品を広く総合的に扱うよりも、特定器種への検討をさらに深めていくという方針を採った。そこで、各種の金工品の中から検討対象を「垂飾付耳飾」(図1)と「装飾付大刀」(図2)という二器種に絞ることとした。具体的な研究に際しては、資料の属性分析による詳細な型式学的分析と、悉皆的な実見観察調査に基づく製作技術の検討という二つの軸を方法の基礎としている。前者は、金工品全体を構成する個々の部品を属性とみなし、属性毎に認められる時間的な変化や、所属性の組み合わせの偏りを抽出することで、金工品そのものの自律的な編年と内

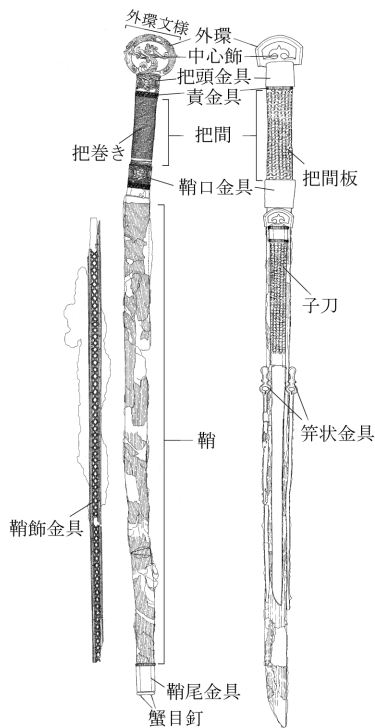


図2

装飾付大刀の各部名称

主環			連結金具					
	太環	細環		糸状	板状 a1 類	板状 a2 類	板状 B1 類	板状 B2 類
中間飾								
	空球形	華籠形 a 類	華籠形 b 類	華籠形 c 類	華籠形 d 類	立方体形		
	円筒形 a1 類	円筒形 a2 類	円筒形 a3 類	円筒形 b1 類	円筒形 b2 類			
	円筒形 c1 類	円筒形 c2 類	花瓣形 a 類	花瓣形 b 類	楕球形			
垂下飾								
	心葉形 A 類	心葉形 B1 類	心葉形 B2 類	心葉形 B3 類	心葉形 B4 類	心葉形 B5 類		
	心葉形 C 類	円形	竹葉形 A 類	竹葉形 B 類	ペン先形			
	錘形 A1 類	錘形 A2 類	錘形 A3 類	錘形 B1 類	錘形 B2 類			
								十字形

図3 垂飾付耳飾の部分別分類模式図

在する系統差の把握を目指すものである。そうして明らかにした時間軸を基準にしつつ、後者の実見調査を通じて、特定地域の意匠や製作技術が周辺地域へといつ、どのように伝播しているのかを明らかにしていくことで、地域間の交流関係を炙り出していく。なお、両者の方法は互いに相互補完的な関係にあり、後者の実見調査の中で新たに技術的な属性を見出し、型式学的検討に加えたりもした。

4. 研究成果

第一に、垂飾付耳飾の朝鮮半島南部の各地における出土例を悉皆的に集成・分析し、系統的・編年的整理を加えた。具体的には、新羅、大加耶、百済の各地域で出土する垂飾付耳飾に属性分析を実施し、朝鮮半島内での技術交流の様相を明らかにした。とりわけ、出土例の多い新羅の垂飾付耳飾(図1・3)については、土器編年に拠らない5段階の自律的な編年体系を確立し、文献史料の情報を加味しつつ、独自の基準で実年代を付与した。

第二に、朝鮮半島出土の垂飾付耳飾の汎地域的検討を基に、日本列島で出土する垂飾付耳飾の系譜的検討をおこなった。属性レベルでの比較を詳細に行った結果、従来朝鮮半島、特に大加耶からの舶載品とする見方が支配的であった、「長鎖式耳飾」という長い兵庫鎖を用いる資料群(図4)について、古相の金製資料から日本列島で製作されていた可能性が高いことに論及した。

第三に、装飾付大刀の朝鮮半島出土例の悉皆的分析を通じて、新羅、百済、大加耶の技術的特徴を明確にした。特に、百済と大加耶のそれぞれの製品を峻別する技術的特徴を把握し、百済の熊津遷都を契機に大加耶へと製作工人が流出すること、大加耶の滅亡を契機として日本列島へと製作工人が移入し、単龍・単鳳環頭大刀製作を中心的に担う存在となることなど、技術の伝播を半島情勢の変化と結びつけて論じることができた。

第四に、これまでその存在が知られていなかったり、詳細が明らかにされていなかったりした国内外のコレクション資料や個人蔵資料(図5)の一部を、図化・撮影して研究資料として公開した。京都府穀塚古墳の鉄製単鳳環頭大刀(図6)では、最新のCTスキャンデータを援用して表裏の象嵌文様の分離・抽出に成功しており、日本考古学で伝統的におこなわれてきた調査法に、新たな調査技術を導入・活用していく重要性を示すこともできた。

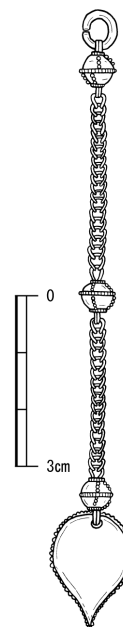


図4
金製長鎖式耳飾
(福井・向山1号)

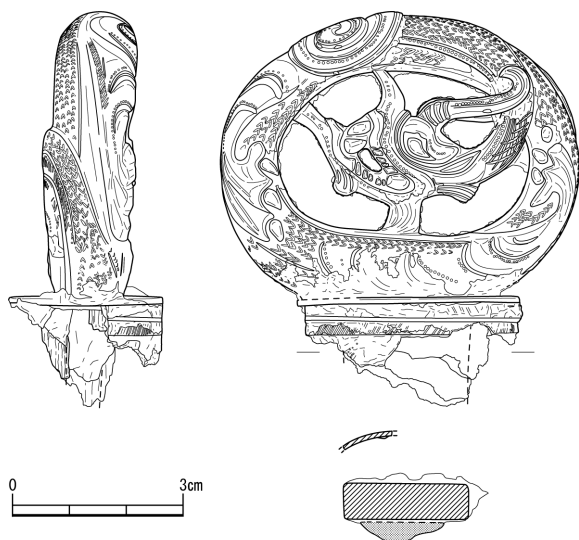


図5

新たに図化した竹内栖鳳旧蔵とされる環頭大刀

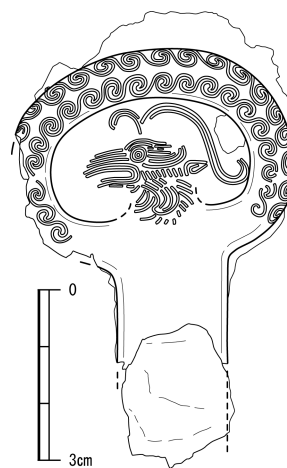


図6

京都府穀塚古墳出土
単鳳環頭大刀の象嵌文様

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計7件)

金宇大、旋回式単龍環頭大刀の新例とその評価、文化財と技術、査読無、第9号、2019年、13-30

金宇大、The Pommel of a ring-pommel sword with central decoration missing, News Letter, Project for Researching Gowland's Collection、査読無、No.4、25-26

金宇大、木村定三コレクション M318 単龍環頭大刀の検討、愛知県美術館研究紀要 木村定三コレクション編、査読無、25号、2019年、73-79
金宇大、穀塚古墳出土環頭大刀に施された象嵌文様、京都大学総合博物館ニュースレター、査読無、No.38、2-3
金宇大、江口治郎コレクションの龍鳳文環頭大刀、和泉市久保惣記念美術館紀要、査読有、20号、2016年、55-44
金宇大、新羅における垂飾付耳飾の変遷と系譜、文化財と技術、査読無、第7号、2015年、143-179
金宇大、単龍・単鳳環頭大刀製作の展開、古代武器研究、査読無、vol.11、2015年、83-102

〔学会発表〕(計5件)

金宇大、日本列島出土装飾大刀의 多様성과 그 系譜 認識、金工品으로 본 古代 東亜 細亜 世界의 交流、2018年(韓国語での発表)
金宇大、三累環頭大刀の再検討とその性格についての予察、朝鮮古代研究会例会、2017年
金宇大、出自が明らかでない環頭大刀をめぐる問題、第86回文化財と技術の研究会、2017年
金宇大、洛東江以東地域における装飾付環頭大刀の変遷、第28回東アジア古代史・考古学研究会 交流会、2017年
金宇大、日本列島出土垂飾付耳飾の再検討 いわゆる「長鎖式耳飾」を中心に、朝鮮古代研究会例会、2016年

〔図書〕(計1件)

金宇大、京都大学学術出版会、金工品から読む古代朝鮮と倭 新しい地域関係史へ、2017年、434頁

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

金宇大、木村定三コレクション環頭大刀・耳環目録、愛知県美術館研究紀要 木村定三コレクション編、査読無、25号、2019年、80-94

6. 研究組織

(1) 研究分担者

なし

(2) 研究協力者

なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。